Preliminary Study of Vietnamese Decorated Tile Found In Java, Indonesia(2)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17018

インドネシア、トロウラン遺跡とベトナムタイル

Preliminary Study of Vietnamese Decorated Tile Found In Java, Indonesia (2)

坂井　隆（国立台湾大学芸術史研究所）
Sakai Takashi (Graduate Institute of Art History, National Taiwan University)

1　はじめに

1-1　目的

本稿は、東南アジアへのイスラーム教伝来に関係する物質文化の探求を目的として、インドネシアのトロウラン遺跡などで行った2008年８月の初歩的調査の報告である。

1-2　研究史

トロウランTrowulanは、インドネシアのジャワ島東部に位置する遺跡で、ヒンドゥ・ジャワ文化の最後を飾ったマジャパイトMajapahit王国（13世紀末ー16世紀初頭）の王都と考えられている。

インド系文化が最初にジャワ島に足跡を残したのは5世紀頃とされ､以後西部(5,6世紀)･中部(7-9世紀)･東部(10-16世紀)と中心を移動させていった。この間、仏教も含めて渡来したインドの宗教文化は在地信仰との混淆過程を現し、ヒンドゥ・ジャワ文化と称せられている。

そこにはボロブドゥルBorobudurやプランバナンPrambananなど、世界遺産にも登録された壮大な石造建築が特に中部ジャワ期に顕著に発達した。その傾向は東部ジャワ期まで継承されるが、今日まで発見された遺構のほとんどは仏教もしくはヒンドゥ教の寺院跡である。それらの築造を主唱した権力者の居住地、あるいは王都と推定できる遺跡は、このトロウランがほぼ唯一の存在である。

トロウランの調査は、オランダ植民地時代の1920年代において、オランダ人建築学者マクレーヌ・ポントH.Maclaine Pontによって始められた。そしてインドネシア独立後は国立考古学研究センターに引き継がれ、80年以上の調査経過を経て今日に至っている。ここでは当初より膨大な陶磁片が発見され、早くからオルソイ･デ･フリーネスOrsoy de Flinesなどによって注目されてきた。そこには少なくない量の元青花片と共にベトナム産タイルも含まれ、1970年代以降より繭山康彦（繭山1977）やジョン･ガイJohn Guy（Guy 1989）らによる関心を受けてきた。

ここで発見されたタイルの多くが北部ベトナムのレLe朝時代産であることは施釉や図柄の特徴より誰しも認めるが、ジャワ島以外の他地域での出土例は知られず、ベトナム自体においても発見例は稀少と言わざるをえない[1]。そのためトロウランの性格を考える上でも、このベトナムタイルの意味は小さくない存在であると考えられる。

だが残念ながら建築学者のポントは陶磁片に関心を持たず、またそれ以降の調査でも調査報告書は刊行されていないため、陶磁片の出土状況に関する考古学的な資料はまだ存在していないと言わざるをえない。陶磁史研究を主目的とした繭山やガイの研究とは異なり、マジャパイトと北部ベトナムの関係を物的証拠より考察しようとした場合､極めて遺憾な状態と言える。

そのような中で、出土陶磁片の代表例を紹介した図録が、マリー・フランス・ドゥポワザMarie-France Dupoizatとナニッ・ハルカンティニンシNaniek Harkantiningsihによってようやく刊行された（Dupoizat&Naniek 2007　以下「図録」と略称)。この図録は長年の調査で出土し、また表面採集された膨大な陶磁片の量から見れば、極めて少量の報告である[2]。しかしカラー写真で紹介された資料のほとんどが、確実にトロウラン出土のものであることは重要である。これまでの研究で使われた資料の大部分は、後述のドゥマッ大モスク例を除けば、出土経緯が曖昧なものだったからである。

昨年筆者はその意義に鑑みて、図録掲載のタイル片とジャカルタ国立博物館収蔵資料[3]の比較を行い、併せて繭山やガイの研究との照合的な理解を試みた(Sakai 2008)。ただ先行研究のほとんどが白黒写真であり、また図録のカラー印刷状況も良好とは言いがたい難点があった。さらに筆者自身がほとんど現地の状況について未調査であるという、大きな限界が存在し

ていた。

ベトナム産タイルの研究について、もう一つ重要な場所がドゥマッ Demak 大モスクである。このモスクは中部ジャワ北海岸のドゥマッにあるが、創建年代は 15 世紀後半頃[4]と考えられ、ジャワで現存するモスクでは最古である。

このモスクには、礼拝堂外壁及びミフラーブ周辺壁に計 65 点のタイルが嵌め込まれている。それは釉や図柄から全てがベトナム青花と認定できるものであり、繭山の研究はまさしくこの資料が主対象であった。ベトナム青花自体の大枠の生産年代とモスクの伝承創建年代には大きな差がないため、タイルが嵌め込まれたのは創建時と大きく変わらない可能性が想定できるからである。つまり全てが完形であるそれらのタイルは、使用時の原位置に近い状況を見せていると考えられていた。

また量的には極めて少ないものの同様のベトナム産タイルの使用例は、ドゥマッ近隣のクドゥス Kudus のムナラ・モスク Masjid Menara 及び東部ジャワ北海岸のトゥバン Tuban に所在するスナン・ボナン Sunan Bonang 廟で 1 点ずつ確認されている (Dupoizat & Naniek 2007, pp.101)。

1-3　調査概要

本稿の基礎になった調査は、インドネシア国立考古学研究センターのナニッ上席研究員との協力で、初歩的踏査として下記のように実施した。

対象地：

A　東部ジャワ州モジョクルト Mojokerto 県トロウラン遺跡及び遺跡博物館

B　同上　グレシッ Gresik 県スナン・ギリ Sunan Giri 廟

C　同上　ラモンガン Lamongan 県スンダン・ドゥウール Sendang Duwur モスク

D　中部ジャワ州クドゥス県ムナラ・モスク

E　同上　ドゥマッ県大モスク

F　同上　スマラン Semarang 市中部ジャワ博物館

期間：2008 年 8 月 24 日より 31 日

調査者：坂井　隆、瀧本正志

協力機関：観光文化省文化財管理局東部ジャワ州地区文化財管理事務所

協力者：Danang Wahyu Utomo (East Java), Sancaka Dwi Supani(Central Java)

2　トロウラン遺跡

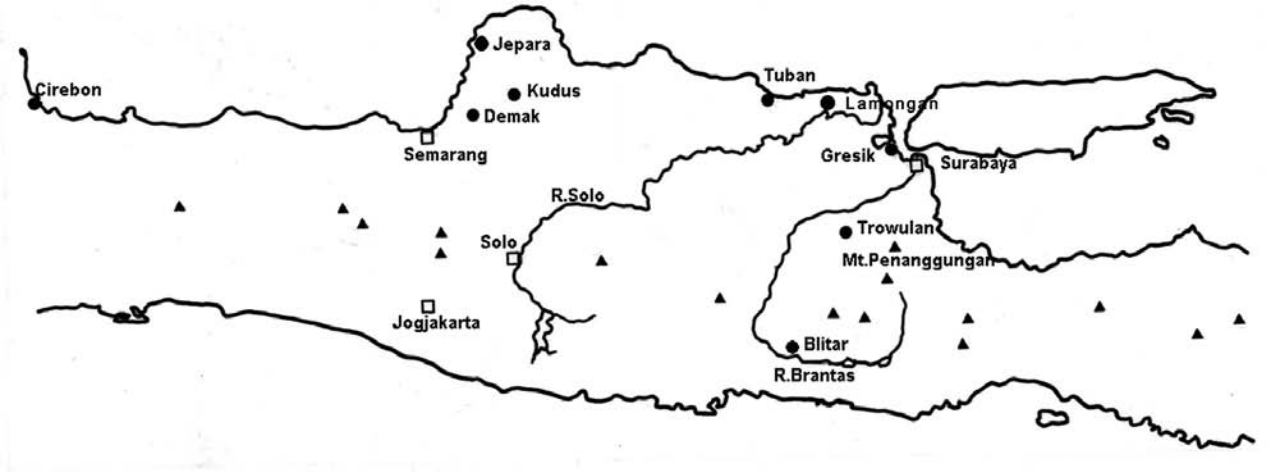
まずトロウラン遺跡の現況について紹介したい。

トロウランはジャワ第二の川ブランタス Brantas 川の下流右岸平地に位置し、河口のスラバヤ Surabaya からは 50km ほどの距離にあたる (Map)。この川はスラバヤ南 80km のアルジュナ Arjuna 火山に源を持つが、周囲の火山群を大きく時計回りに流れる。上流のマラン Malang 高原、中流のクディリ Kediri 盆地など、流域のほとんどの地域は東部ジャワ期の政治文化の中心をなしていた。トロウランから東南東 30km には聖山プナングンガン Penanggungan が屹立しており、遺跡内のどこからも眺望できる。

東西 3.5km 南北 4.0km の範囲内に、いろいろなレンガ造建造物を中心とする遺構が地上に残っている。それは主に次のような種類に分けられる。

寺院跡：ブラフ Brahu、グントン Gentong

門跡：ウリンギン・ラワン Wringin Lawang、バジャン・ラトゥ Bajang Ratu



Map　Trowulan & other sites in Java

水浴場跡：ティクス Tikus

池：スガラン Segaran

その他建造物群：クダトン Kedaton

イスラーム墓：トゥロロヨ Troloyo（1368 年）、

チャンパ王女墓（1448 年）

また発掘調査によって検出された建物跡は多く、比較的大規模な２カ所では検出状況がそのまま保存公開されている。

以上の中で、全体の中央やや南に位置するクダトン建物群は、地上に残るレンガ造基壇の周辺からレンガ造建物跡、また大型建物礎石などが発掘調査で集中して発見されており、地名からも王宮跡的な地域の可能性が推定されている[5]。それらの遺構群の南に接して発掘により、大型の建物跡の一部が発見された。注目すべきは床部分で、ここでは六角形の無釉磚が敷き詰められた状態で検出されている（Fig.1）。酸化炎焼成されたもので、基本的にはレンガと同一の技術で焼成されたと考えられる。しかしこのような規格された床材の検出は、他では確認されていない。

また全体の遺構分布には大きな特徴がある。すなわち、寺院跡は北西側、門跡は北東及び東側に残っている。ところが門跡から伸びるはずの道路の走向は、分布の中心やクダトン地域に向かっていない。また城壁的なものの延長も確認されていない。つまりこれらの大規模な門（Fig.2,3）は、全体を囲う市壁の城門とは考えられないのである。一方この分布範囲内には、直線状で直角に交差する運河が、東西方向５条以上、南北方向４条以上検出されている。これらは何らかの状態で北西側に位置するブランタス川まで繋がっていた可能性が想定されている。なお長方形のスガラン池（約 300 × 100m）は運河網の北東角に位置しているので有機的な関係が想定されるが、下流側にあたり面積も小さいためアンコールでのバライのような役割は考えにくい。

トロウランのあり方はインド文化の影響は残るものの、正方形城壁の中央に中心寺院が配置されたアンコール・トムのような王都とはかなり異なった様相が想定できる。ヒンドゥ・ジャワの王権では、ヒンドゥ神と同一視された王の遺体は火葬され、遺灰が寺院の中心地下に据えられたと考えられている。しかしトロウランに残る寺院跡はいずれも北西側で、王都の中心に位置していたことにはならない。

ここでもう一つ重要な要素は、イスラーム教徒の居住である。南端に位置するトゥロロヨ古墓群の墓石には、太陽を象徴化したマジャパイトの紋章と共にイスラーム暦の年号が刻まれている（Fig.4）。1368 年というその年代は王国の絶頂期に相当するが、当時ここには一定人数のムスリム住民が住んでいたことになる。80 年後の 1448 年の年代が刻まれたチャンパ王女の墓と呼ばれるイスラーム墓も似た墓石の特徴を持つが、彼女はこの時期に進展していたジャワのイスラーム化についての伝承では中心的な存在である[6]。15 世紀代のマジャパイト王権については記録に乏しいが、相当の影響力を持つムスリムがすでにここに居住していた可能性は十分に存在する。

残念ながらトロウランの個々の遺構には上記イスラーム墓を除いて紀年銘はなく、また発掘調査でも出土陶磁片との関係で遺構の年代が把握されたことはない。発掘調査自体も全体面積に比べれば極めて部分的で、なおかつ調査報告書も刊行されていないため全体状況を把握するには全く資料が足りない。

しかしそのような現状の中で想定される都市構造は、アンコール・トムのような小宇宙の中心を企図したと見ることは不可能である。むしろ縦横の運河網を交通路として海に繋がる河川港市的な性格を持っていたと見ることができる。

３　トロウラン出土のベトナムタイル

今回の調査では、東部ジャワ文化財管理事務所所管のトロウラン博物館 Trowulan Information Center が収蔵する陶磁片の一部を実見した。この資料は 1920 年代のポント調査以来の発掘調査出土、もしくは表面採集によったものの集積である。全体量は膨大で博物館内の収蔵棚に保管されているもの以外に、屋外の陶磁片収納場（Fig.5　レンガ製で約４×４×0.5m）に大量に存在する。

対象とした資料は博物館収蔵棚内にあったタイル片全てと、50 万片以上と思われる屋外収納場の上面にあったもののみである。３時間ほどで撮影と略測した破片 38 点を紹介したい。

これらについて形態分類ごとに記してみる（Table）。

A カルトゥーシュ枠形：5 点 CT1-CT5

いずれも青花である。CT1（Fig.6）は大きな破片で、表面に牡丹唐草文を描き、裏側は３条の台（高さ

type	cord	kinds	motif	length	wide	thick	foot	note
A	CT1	B & W	peony arabesque	10.5	12.5	1.8	2	3 foot lines
A	CT2	B & W	leaves	8		1	2.2	no circle lines
A	CT3	B & W	circle lines	6		1	2.7	
A	CT4	B & W	cloud	3.8		1.1	2.6	
A	CT5	B & W	lotus arabesque	2.5	13.5	1.2	2.6	2 foot lines
B	Q1	B & W	cloud	6.3	2.8	1.2	3.8	dark gray, line at side, inner foot glazed
B	Q2	B & W	peony arabesque	10.5	8.5	1	2	
B	Q3	B & W	cloud	6		1.5	4.7	
B	Q4	B & W	arabesque	11.5	11.5	1.5	3	
B	Q5	B & W	cloud	7.5		2.5	0.5	
B	Q6	B & W	arabesque	9.7		0.9	2.8	
B	Q7	B & W	peony arabesque	8		1.5	2.8	
B	Q8	B & W	unknown	4.1		1.4	1.6	
C	CI1	B & W	peony arabesque	12.4	9.5	1	2.2	diameter24cm? Cartousche?
C	CI2	B & W	sector segmentation	18.5	7	1	3.5	iron rust inner foot, diameter 24cm
C	CI3	B & W	sector segmentation	9.1	7.7	1	3.8	iron rust inner foot
C	CI4	B & W	unknown	5		1.8-		
C	CI5	B & W	circle lines	3.8		2	2.2	
C	CI6	B & W	cloud	6.7		1.3	3.2	
D	L1	B & W	lotus petal	19.5	7	1.3	4.2	diameter24,5cm, edged flour form, thin glaze
E	CST1	B & W	peony arabesque	6.8		2	1.8	cartouche-effort?
E	CST2	B & W	peony arabesque	6.9		1.3	3	
E	CST3	B & W	peony arabesque	5.5	2.8	0.8	3	
E	CST4	B & W	peony arabesque	4.2	4.3	2.2	1.6	
E	CST5	B & W	cloud?	5.2	2	0.9	2.1	hexagonal?
F	CSS1	B & W	lines	3	2.2	2.8		
F	CSS2	B & W	lines	6.2	4.5	1.7	1.3	diagonal foot direction
F	CSS3	B & W	lines	4.9		1.7	0.9	wide foot
F	CSS4	B & W	lines			1.7	2.5	squire?
G	SP1	B & W	edged leaf line	8.5	6	1.7	1.3	a hollow at center
G	SP2	B & W	edged leaf line	10.6	6.2	1.6	1.4	2 hollows
G	SP3	B & W	edged leaf line	7		1.7	1.1	a hollow
H	SQ1	iron	whirl, lines,flower?	12.3	8	2	2.3	no glaze at behind
H	SQ2	iron	mono glaze	5.4	6	2	0	no glaze at behind
H	SQ3	iron	mono glaze	10.4		2.1	0	no glaze at behind
H	SQ4	iron	mono glaze	10.2		2.2	0	no glaze at behind
H	SQ5	iron	diamond line	2.2		4.5	0	no glaze at behind
H	SQ6	iron	diamond line	7.5	2.8	2.2	2.3	no glaze at behind
I	T1	green	mono glaze	6.5	6.3			no glaze at behind, foot wide 1.7cm
I	T2	iron	arabesque			2	1.5	no glaze at behind, hollow at center of foot
I	T3	iron	arabesque?			1.7	0	no glaze at behind
I	T4	iron	arabesque	8.3	6.5	3.1		no glaze at behind
J	M1	B & W	leaves	9	6	1.2	2.5	lotus?

Table Vietnamese Tile shards found in Trowulan

2cm）が直交して付けられている。CT2（Fig.7）は楕円形のコーナーと思われる形で、表面には圏線なしに特徴的な葉文が描かれる。CT3（Fig.8）は圏線のみが見えるコーナーの小片だが、台は2.7cmの高さがある。CT4は稜花形の窪み部片で、雲文が描かれる（Fig.9）。CT5は二重圏線内に蓮華唐草文を描き、裏には２列の台がみえる（Fig.10）。

B 花弁形：8 点 Q1-Q8

いずれも青花である。Q1は葵花形で、三重圏線と雲文を描く（Fig.11）。台高は3.8cmと高く、台内も施釉している。Q2は４弁稜花で、二重圏線内に牡丹唐草文が見える（Fig.12）。Q3も４弁稜花で雲文が描かれるが、台高は4.7cmもある（Fig.13）。Q4はやや丸みを帯びた４弁稜花で蔦唐草が描かれる（Fig.14）。Q5は二重圏線内に雲文が描かれる。外面端部は外反傾向があり、４弁稜花片と考えられる。Q6は先端がかなり突出すると共に下部が大きく（Fig.15）くびれた４弁稜花で、二重圏線内に唐草文が描かれている（Fig.16）。Q7は４弁稜花で、二重圏線内に牡丹唐草文が描かれている（Fig.17）。Q8は４弁稜花で、太い圏線内に直角に曲がる線が見える（Fig.18）。

C 円形：6 点 CI1-CI6

いずれも青花である。CI1は細い二重圏線内に牡丹唐草を描く（Fig.19）。外縁部の走向は少し楕円傾向のため、カルトゥーシュ枠形の可能性も考えられる。CI2は直径24cmの円形で、二重線により内接弧状十

字形で四分割し内部に唐草文を描く（Fig.20）。高台内に鉄錆がある(台高 3.8cm)。CI3 もほぼ同一文様で、唐草内には花文があり、鉄錆は高台側面まで至っている（Fig.21）。CI4 は二重圏線内に不明文が描かれた小片で、花弁形の可能性もある（Fig.22）。CI5 は三重圏線が描かれた小片である（Fig.23）。CI6 は二重圏線内に雲文が描かれており、台高は 3.2cm である(Fig.24)。

D 稜花形：1 点 L1

青花で外側に三重区画蓮弁文を配し、内側には何らかの具象的な主文がある（Fig.25）。直径は 24.5cm ほどとなり、弁数は 20 弁が想定できる。釉は薄いが、高台は 4.2cm を測る。側面にも稜花の凹凸が施されている。

E 変形十字形：5 点 CST1-CST5

いずれも青花である。CST1 は二重圏線の内側に牡丹唐草が描かれている（Fig.26）。カルトゥーシュ枠形の可能性もある。CST2,3 は弧状剣形部分で二重圏線内に牡丹唐草が描かれる（Fig.27,28）。共に高台は 3cm の高さを持つ。CST4 は直線状剣形部分で、二重圏線の内側に牡丹唐草が描かれている（Fig.29）。CST5 も直線状剣形部分と思われるが、六角形の可能性もある。二重圏線の内側に弧状の不明文が描かれる(Fig.30)。周縁部以外に頂点から対角線方向にも高台が付けられている。

F 段十字形：4点 CSS1-CSS4

いずれも青花である。CSS1 は内側段部分で、二重圏線内に菱形枠線が描かれる（Fig.31）。CSS2 も同様だが、菱形枠線は三重になっている（Fig.32）。CSS3 は外側段部分で、二重圏線内側に菱形枠線が見える(Fig.33)。CSS4 も二重圏線が描かれた外側段部分と思えるが、裏面の高台の状態が CST3 より幅狭く高い(Fig.34)。方形の可能性も残る。

G 渦状剣形：3 点 SP1-SP3

いずれも青花である。SP1 は細い圏線内に唐草を描き、中央の三角形部分は焼成前に形成された漏斗状の孔をなしている(Fig.35)。SP2 もほぼ同形同文様だが、右端下側にも孔が見える（Fig.36）。SP3 は左端下側同位置に孔がある（Fig.37）。いずれも高台は 1.1 ー 1.4cm と低い。

H 方形：6 点 SQ1-SQ6

いずれも鉄絵または鉄釉である。SQ1 は角部分で、二重圏線・雷文・三重圏線という外側部分の内側に花弁形が描かれる（Fig.38）。素地に直接鉄絵を描き、透明釉を表のみにかけている。SQ2 は幅広の外側盛り上げ部分を持つ表側全面に鉄釉が施される（Fig.39）。SQ3,4 はほぼ同様の破片である（Fig.40,41）。SQ5 は鉄絵で圏線の内側に白抜き菱形列を設ける（Fig.42）。SQ6 はほぼ同様の角部分である（Fig.43）。SQ1 と SQ6 のみ高 2.3cm の高台が見える。

I 三角形：4 点 T1-T4

T1 が緑釉で、他は鉄絵である。T1 は鋭角三角形の頂部で、表面のみ施釉する（Fig.44）。T2 は正三角形ほどの角度を持つ頂部で、圏線の内側に白抜きで唐草文帯を描き、さらに内側に圏線を設けている(Fig.45)。T3 は同様の白抜き文様帯の破片である（Fig.46）。T4 は T2 に似た角度の頂部だが、直接鉄絵で唐草文を描き、内部に二重圏線が見える（Fig.47）。T3 以外は高台があり、T2 は高 1.5cm である。

J 山形：1 点 M1

青花である。段十字形に似ているが、下側が平坦なのに対し、上側側面は右端より 3cm のところで直角に立ち上がる（Fig.48）。三重圏線の内側に肉太の葉唐草が描かれ、左端に花弁の一部が見える。高台は 2.5cm の高さを持つ。

以上の 10 分類が今回の調査で判明したが、前稿で示した写真による仮分類との関係は次のようになる(左が仮分類)。

Cartouche-effort style Oblong sub-style → A カルトゥーシュ枠形
Cartouche-effort Quatrefoil sub-style → B 花弁形
Circle style Simple sub-style → C 円形
Circle style Multi sub-type → D 稜花形
Cross style Normal sub-style → F 段十字形
Cross style Transformation sub-style → E 変形十字形
Hexagonal style → 未確認（E の一部に可能性あり）
Spiral style → G 渦状剣形
Square style → H 方形
Triangle style → I 三角形

最後の山形はこれまで未確認の種類である。ただ基本的には渦状剣形と似た形状とも思われる。

また釉の種類は、青花・鉄絵・緑釉の３種類を確認した。青花には裏面に鉄錆処理がされたものもある。これらの釉種類は、次のように器形との間に興味深い関係が見られる。

大部分は鉄錆のない青花だが、円形には鉄錆処理のものが含まれる。鉄絵は方形と三角形だけであり、これまでほとんど言及されてこなかった緑釉は三角形にしか見られない[7]。

器形としては2cmほどの高い高台を持つのが全体的な特徴だが、3cm以上の特に高い高台と1cm以下の低い高台も見られる。前者は、円形・変形十字形・稜花形・花弁形、後者は花弁形・段十字形の中に含まれる。

渦状剣形に孔があることは興味深い事実である。３カ所の孔が考えられ、釘などによる固定を前提に製作時にあけられている[8]。

調査対象は極めて少ない数であり限界は大きいが、これまでの公刊写真資料による検討からは格段に異なった観察を行うことができた。

４　ジャワ島北海岸の関連遺跡

次に同時に行った関連遺跡での踏査成果を資料ごとに報告したい。

4-1　ベトナム産タイル

同様のベトナム産タイルの使用例として最も重要な場所が、冒頭で記したドゥマッ大モスクである。

この状態については繭山の研究に大きく異なることはないが、上記トロウランでの分類に併せて65点のタイルを整理してみたい（位置呼称は繭山1977に準ずる）。

A カルトゥーシュ枠形：10点

いずれも外壁で、SIIとNII部分に各５点ずつ見られる。両端を稜花状にしたものが６点、葵花状にしたものが４点で、前者は牡丹と蓮華を主文とする唐草文が描かれ、後者は霊獣文が主文である。

B 花弁形：19点

外壁に17点（SIに４点、SIIIに４点、NIに５点、NIIIに４点）、そしてミフラブ上面に２点ある。稜花形と葵花形に分かれ、稜花形は４弁と８弁、葵花形は４弁と横長の６弁がある。稜花形には牡丹・蓮華唐草文が描かれているのに対し、葵花形の４弁には段十字窓鳥文、横長６弁には葉唐草文が描かれている。

C 円形：1点

ミフラブ内に見られる。内接弧状十字形で四分割し、外側には蓮華唐草文が描かれている。

E 変形十字形：11点

ミフラブ内に１点、また外壁では、NIIとSIIに２点ずつ、NIIIとSIIIに３点ずつ見られる。後者の中央にあるものが共にやや大きいが、基本的に形状は同じである。剣形を天地に、楕円形を左右にして嵌められている。牡丹・蓮華唐草文が描かれている。

F 段十字形：24点

１段形がNIとSIに３点ずつ、２段形がNIIに４点、NIIIに２点、SIIに４点、SIIIに４点見られる。また３段形がNIIIに２点とSI に１点、そしてミフラブには変形２段形が１点ある。

その他の稜花形・渦状剣形・方形・三角形・山形そして六角形は存在しない。

大半を占める外壁では、全体として礼拝所への入り口を中心に極めて対称的な配置が試みられている。入り口を中心に各壁面に、それぞれ11点、11点、8点と同数かつ文様まで含めて同種類のタイルの嵌め込みが企図されたことは間違いない。しかし南端のSI壁面のみが例外で、本来は北端のNIと同様なら中央列には花弁形が２点上下に揃う必要があるにもかかわらず、上面のものは３段形の段十字形になっている。

ミフラブ内には、上から円形・特殊段十字形・変形十字形が並び、ミフラブ外面上位には２点の花弁形が嵌められている。

これらの状況を考えると、ベトナム産タイルの設置時点ではかなり豊富な同種タイルの用意があったことが想定できる。ただし花弁形については数が足りなかった。そこに入れるべきものと同種類の花弁形はミフラブ外面に２点ある。しかしこの部分の嵌め込み装飾は、他に11点以上の木彫と共に同一の方形単彩釉タイル面（Fig.49）になされている。

この単彩釉タイルはミフラブを形成するアーチのレンガも含めて、19世紀以降の製品と判断するのが妥当である。つまり５点のベトナム産タイルがあるミフラブ周辺の現状は、創建当初の状態とは考えられない。一方60点の同タイルが嵌められた礼拝堂外壁について、塗布されている漆喰は塗り直されているが、内部の恐らくレンガ製壁面の改修状況は不明である。

しかしモスクでは本来的に、ミフラブ周辺の装飾が重要視されるはずである。そこの改修された部分に花弁形があり、その形のものが外壁では１点足りない状態である。そこからミフラブ改修時に、外壁にあった花弁形を転用した可能性も考えられる。そして外壁には３段十字形が補われた。この３段十字形が本来どこ

にあったかは分からない。しかし他に３段十字形が２点あるのはNIIIだが、それと対称の位置になるSIIIの四隅は２段形で占められている。この部分も対称性を求めた嵌め込みの考えからはずれている。

以上をまとめれば、トロウランのベトナム産タイルに比べると、ここで現在見えるタイルの種類は器形また釉の種類が少ない。唯一の例外はミフラブ内にある変形２段形だが、基本的な構成は２段十字形と円形が合一されたものであり、全く別種とは言えない。また現在の嵌め込み状態は、ミフラブを中心に完全に創建当時の原位置であるとは言いがたい。

ドゥマッ大モスクの次に重要な場所が、クドゥスのムナラ・モスクである。そこでのベトナム産タイルの使用状況を見てみたい。

このモスクはドゥマッ大モスク以上に、ジャワ初期イスラーム建築において重要な役割を占めている。ムナラとはミナレットのことで、その名が示すようにこのモスクのミナレット（Fig.50）は大きな特徴がある。レンガで築かれたこのミナレットは、形態的には全くヒンドゥ・ジャワ文化の寺院建築そのものであり、特にマジャパイト様式とされる1300年頃創建のチャンディ・ジャウィCandi Jawiや1369年の紀年銘を持つパナタランPanataran寺院のチャンディ・タンガルCandi Tanggalとほとんど同じ形状である[9]。唯一異なるのは頂部が削られて木造小屋組が付加され、そこに至る通路として本来神像が安置された内部空間から垂直の昇降路がある点である。

このレンガ造ミナレットの前面には境内を区切るレンガ造の塀が南北に延びており、ミナレットに向かって左右両側に二つの門が設置されている。その二つの門上部外面に、それぞれベトナム産タイルが嵌め込まれている。

まず向かって左側（南側）の門には、アーチ直上に青花の変形十字形タイルが見られる[10]（Fig.51,52）。二重圏線内に蓮華唐草文が描かれ、楕円形部分を天地にしている現状では天地26cm左右34cmそして厚さ4.5cmを測る。

このタイルの形状は、ドゥマッ大モスクのNIII面中央の例に似て楕円形部が横に膨れた大型である。また蓮華唐草文の描き方は同NII面左側の例に近いと言える。基本的にはドゥマッ例とほぼ同一の製作と考えて間違いない。

一方、右側（北側）の門には、ほぼ似た位置に方形の鉄絵タイルが見られる[11]（Fig.53,54）。圏線内に擬雷文帯と二重圏線があり、その内部には花弁形の三重区画の中に蓮華唐草が大きく白抜き状に描かれている。略測での法量は、幅29.3cm天地19.2cm厚さ6.8cmを測る。これはトロウランで確認した方形鉄絵タイルSQ1に酷似しており、僅かに雷文の走向が逆になっているだけである。

この２点のタイルはドゥマッの例に比べて不安定な設置状況であることを見れば、さらに完全な原位置を保ってはいないと思われる。しかしその１点が、ドゥマッには存在せずトロウランに酷似例がある方形鉄絵であることは大きな意味がある。ミナレットの建築様式とも併せて、本例はよりトロウランの状態に近いと考えられる。

なお重要なことは、レンガ造ミナレット本体のレリーフ（Fig.55）である。基壇には３層のレリーフ帯がめぐっている。第１層と第２層は四隅と中央に２段十字形を配し、それらの間に単純な長方形枠を２カ所ずつ配置している。第３層は四隅が縦置きカルトゥーシュ枠形で、中間には２段十字形４カ所と円形５カ所を互い違いに並べている。またヒンドゥ寺院の場合神像レリーフが配置される身舎の龕にも、２段十字形と縦置きカルトゥーシュ枠形が見える。２段十字形と円形のレリーフはいずれも中央が窪んでおり、現在円形レリーフには後代の陶磁器皿が嵌められている[12]。ミナレット創建時には、２段十字形・円形・カルトゥーシュ枠形の造形が主な装飾として意識されていたことは間違いない。

もう一つのベトナム産タイルの例は、トゥバンのスナン・ボナン廟で見られる。この廟のレンガ造中門左側上部の方形区画内に、青花タイルが嵌め込まれている（Fig.56）。これは３段の段十字形で、四隅に葉形突起、内部には蓮華状円内に渦状葉文が描かれている。ドゥマッのNIII面下位左側例やSI面上位中央例にかなり似た描き方をしている。

上述のようにドゥマッではかなり意識して対称配置を試みながら、花弁形と３段十字形に位置に不整合な状況が見られる。そのこととの関係はもちろん不明だが、ここに１点のみ存在する種類がそのようなものであることは注意したい。

4-2　木彫・石・レンガレリーフ

以上のベトナム産タイルと近似した装飾が、中・東部ジャワの初期イスラーム建築に確認できる。それを簡単に紹介したい。

まずクドゥスのムナラ・モスクの礼拝堂入り口には、レンガ造の旧建物の入り口と壁の一部が残されている。この入り口両側の壁面に、石製レリーフが嵌め込まれている。２点はカルトゥーシュ枠形を縦にしたもので、内部には牡丹唐草文が描かれている（Fig.57a)。別の２点は４弁の花弁形を正方形状に配置したものである（Fig.57b)。また礼拝堂横のレンガ製泉水場にも斜網目を内部に描くカルトゥーシュ枠形レリーフが横に配置されている。これらの設置状況は、泉水場を除いて、レンガ壁面から浮き出ており、壁面との間には漆喰状のものによる不整合な接合痕が残っている。そのため旧建物の建造よりは確実に遅れた設置だろう。また泉水場のものは本体のレンガ構造と同時期と考えられるが、レリーフ自体は粗雑である。

ムナラ・モスクの礼拝堂裏に接してスナン・クドゥス Sunan Kudus 廟がある。その本殿外壁には木彫透かし彫りの３段十字形窓がある（Fig.58)。内側にはさらに同形の３段十字形が描かれ、内部には四点星内に４弁花文が刻まれている。

またクドゥスではムナラ・モスクから遠くないランガル・ブブラッ Langgar Bubrah モスク跡でも、興味深い装飾が見られる。それはレンガ塀に刻まれたレリーフで、カルトゥーシュ枠形列、そして２段十字形と４弁花文の繰り返し列である(Fig.59)。カルトゥーシュ内は斜線状網目文あるいは花文だが、段十字形内部はスナン・クドゥス廟の木彫と酷似している。

クドゥスとドゥマッから遠くないジュパラ Jepara のマンティガン Mantingan のモスクに関連する石造レリーフがあることは、すでに繭山が指摘している。このモスクに当初あった石造レリーフが２点、スマランの中部ジャワ州博物館に保管されていた。１点は方形内に二重に２段十字形を刻んだもので、十字形内部は唐草文が見られる（Fig.60)。別の１点はカルトゥーシュ枠形で、内部には細かく草花文が描かれている(Fig.61)。この背面には、ラーマヤナと推定される人物図像が彫られている。

カルトゥーシュ枠形の例は、東部ジャワのスンダン・ドゥウールモスクにも見られる。このモスクの第１基壇のレンガ造外壁には、内部に蓮華唐草文を描いたカルトゥーシュ枠形がある（Fig.62)。このモスクはヒンドゥのガルーダ神像に酷似した石造門のレリーフで知られているが、創建年代は 15 世紀とするのが妥当である。

一方同じ東部ジャワのグレシッにあるスナン・ギリ廟本殿は、木彫透かし彫りで装飾されている。主文は内部に蓮華文を描いた３段十字形、同じく４花弁文と段十字形の組み合わせ、そして森林風景を描いたカルトゥーシュ枠形である（Fig.63)。

以上の例の中で年代が 15 世紀と考えられるのはスンダン・ドゥウールだけで、他は不明である。ただ素材から考えても木彫の場合は、16 世紀代以降になる可能性が高い。石彫とレンガレリーフを比べると、ムナラ・モスクとスンダン・ドゥウールに共通する特徴は、長側面の長さが幅の２倍近くあり、両端の形状は正三角形に近いことである。この特徴を 15 世紀のものと考えた場合、ムナラ・モスクの旧礼拝堂壁面・泉水場とマンティガン例は、長側面の長さが短く両端の突出はかなり小さい。そのため、それらは後出の例である可能性が高い。

しかしいずれにしても、これまで見てきたベトナム産タイルの形状と共通する図柄であることは、興味深い。

５　まとめ

冒頭に記したように今回の調査の主目的は、これまで写真資料でしか把握していなかったベトナム産タイルの実見であった。特に図録刊行によっても部分的にしか報告されていないトロウランの出土状態の確認が、最大の目的であった。

時間的な制限で極めて少数の資料に接したのに過ぎなかったにも関わらず、結果的には多くの事実を知ることができた。特に青花以外に鉄絵や緑釉があること、また渦状剣形に焼成前の孔があること、新しい器形として山形の存在を確認できたことの意味は大きい。

トロウランに運ばれたベトナム産タイルは、ドゥマッの大モスクに現存しているものよりはるかに種類が豊富だったことになる。渦状剣形の孔からも、これらのタイルは明らかに壁の装飾用に作成された。また多くが高い高台を持ち、ほとんどが組み合わせ使用を考えられない器形であることからも、ドゥマッでのように一つずつ壁に嵌め込んで使われたはずである。

唯一の例外は六角形のもので、これは発掘調査で判明した中心部の建物跡で見られた床用の無釉磚との関係を考える必要がある。六角形タイルそのものは発見数量から見ても壁装飾用と推定されるが、その形状の出発が組み合わせ使用を前提とするイスラーム・タイルにあることは、誰しも認めるところである。

ここで重要なことはドゥマッ、クドゥス、トゥバンでの現存例との関係である。いずれも種類数は少ないが、ほとんどがトロウラン出土例と共通している。トロウランが最大の輸入消費地であったことは間違いない。鉄絵と緑釉の形状が限られ、その形状での青花の例がない状態から考えると、ある程度の時期差がそこにあった可能性が想定できる。つまり宮殿の壁装飾として、比較的多くの量が時間幅を持って輸入されていたことになる。

トロウランの最盛期は 14 世紀代だが、その頃にはすでにイスラーム教徒の居住がすでに始まっていた。そして 15 世紀代にはクドゥスやドゥマッなどにモスクが建てられる。その時に、トロウランでの使用を真似して、ベトナム産タイルを装飾に取り入れた。それらのジャワ島海岸部で生まれた初期イスラーム王権とマジャパイト王国の終焉の関係については、依然として不明瞭である。

ただ一般にイスラーム王権側がトロウランの王宮を破壊し、そこで使われていた建築部材を持ってきたという話が信じられている。少なくともベトナム産タイルに関しては、壁に嵌め込まれた装飾であることから、そのような事実は考えにくい。むしろトロウランと同様のシステムで、北部ベトナムへ発注されたとするのが、より自然だろう。その時に器形を選択したとするのが、現状では妥当と考えられる。少なくともムナラ・モスク建設時には、カルトゥーシュ枠形・段十字形など数種類の器形は重要な要素として認識されており、それを元にして発注がなされたと考えられる[13]。そしてジャワのイスラーム化進展の中で、これらのタイルの器形がイスラームのシンボルとして意識されて、その後継続的に使われたと思われる。

問題はトロウランやジャワ海岸部からなされたはずの、北部ベトナムへの発注のシステムである。前稿で検討したように、器形の発想は西方のイスラーム・タイルや施釉レンガ装飾の認識がなければほとんど難しい。その点については、さらなる調査の継続で再度考えてみたい。

本稿は中華民国行政院国家科学委員会補助専題研究「伊斯蘭文化在東南亞地域勃興：以物質文化交換的研究角度為中心」(NSC97-2410-H-002-167-MY3) の成果の一部である。

Acknowledgment: I feel special thanks for help to this paper to;
Indonesia National Archaeological Development and Research Center
East Java Cultural Heritage Preservation Office
Ronggowarsito Central Java Museum
Prof.Naniek H.Wibisono, Drs.Danang Wahyu Utomo, Drs.Sancaka Dwi Supani

註

1 菊池誠一・阿部百合子両氏は、バンドン Van Dong 港跡推定地で、青花雲文が見られるカルトゥーシュ枠形片を採集している。

2 調査対象は考古学研究センター収蔵遺物（ジャカルタ本部とトロウラン事務所）12,684 点とされるが、東部ジャワ文化財管理事務所トロウラン博物館には数十万片の施釉陶磁片が保管されている。

3 これはポントの調査で発見された陶磁片の中から、デ・フリーネスが一部を抽出したものである。比較的大破片の異なった種類が多い（Abu 1981)。

4 繭山はジャワの年代記伝承に基づくマジャパイト王都の陥落年 1478 年を創建年としている。しかし近年の文献史研究では 1527 年頃を陥落年とするのが一般である (Bambang 1984 etc.)。一方ドゥマッのイスラーム権力はポルトガルがマラッカを占領した 1511 年頃には確実に存在しており、モスクの創建が 15 世紀代に遡ることは間違いない。

5 ジャワ語の王宮 Keraton と現存地名の Kedaton の類似。

6 彼女はマジャパイト王と結婚し、その間に生まれた子こそが最初のイスラーム王でマジャパイトに替わってジャワの覇権を握ったドゥマッのラデン・パタッ Raden Patah とされる伝承である。基本的に 16 世紀以降のイスラーム王権はマジャパイトと連続した権力であるとの意識に基づいているが、その変換点にはチャンパ王女が重要な役割を果たしたことになる。

7 緑釉はジャカルタ国立博物館のトロウラン出土資料に 2 点見られる。共に延びる端部を持ち方形と考えられるが、薄い釉厚や黄褐色の素地は今回の資料と類似している。

8 なおジャカルタ国立博物館所蔵品のこの形状のものには、孔

があるものとないものの２種類がみられる。後者は 4cm 以上の高台を持っている。

9 両寺院の形状は千原大五郎の研究が詳しい（千原 1975 pp. 291-328）。

10　正確にはアーチの上に乗っている状態で、その上のレンガ壁面に嵌め込まれているわけでない。そのためたびたび修復がされるようで、図録の写真と今回の調査での実見状態は天地が逆になっている。

11　青花タイルとは異なって、アーチより少し上の位置に設置されているが、やはりレンガ面内に嵌め込んだのではなく、何らかの方法で表面に付着させてある。

12　残っている大部分はマーストリヒト窯のオリエンタル・パターン銅板転写皿である。1 点のみ景徳鎮の粉彩皿が見える。当初どのような陶磁器が嵌められていたのかは、興味深い。

13　ムナラ・モスクのミナレットのレリーフは、トロウラン東方にあるチャンディ・バンカル Candi Bangkal 寺院と類似している（Guy 1989）。その事実は 14 世紀頃と推定されるこの寺院とムナラ・モスクの建設がそれほど大きな時期差がないことの現れであり、西方イスラーム起源の図柄がすでにイスラーム教徒も居住していたトロウランでは一般的になりつつあったことを示していると思われる。

参考文献

千原大五郎

1975,『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会

町田市立美術館

1993,『ベトナム陶磁』東京

2001,『ベトナム青花−大越の至上の華−』東京

繭山康彦

1977,“デマク回教寺院の安南青花陶磚について”,『東洋陶磁』vol. 4, 東洋陶磁学会 , pp. 41-57

1985,“マジャパヒト王都址出土の元代青花磁片”,『元の染付展−14 世紀の景徳鎮窯−』大阪：大阪市立東洋陶磁美術館

Abu Ridho

1981, *The National Museum, Jakarta, The Oriental Ceramics* vol.3, Tokyo: Kodansha

Bambang Sumadio ed

1984, *Sejarah Nasional Indonesia vol.2 Jaman Kuna*, Jakarta: Balai Pustaka

Bui Minh Tri

2001, *Vietnamese Blue & White Ceramics*, Ha Noi: Social Sciences Publishing House

Direktorat Peninggalan Purbakala

2006, *Majapahit Trowulan*, Jakarta: Indonesian Heritage Society

Dupoizat, Marie-France & Naniek Harkantiningsih

2007 ,*Catalogue of the Chinese Style Ceramics of Majapahit, Tentative Inventory*, Cahier d'Archiple 36, Paris: Association Archipel

Guy, John

1989, "The Vietnamese Wall Tiles of Majapahit", *Transactions of the Oriental Ceramics Society*, 1988-1989, 53, (London 1990), pp.27-46

Hasan M.Ambary

1977, *Laporan Survai Kudus*, Berita Penelitian Arkeologi No.14, Jakarta: Pusat Penelitian Purbakala dan Peninggalan Nasional

Miksic, John N. & Endang Sri Hardiati Soekatno

1995, *The Legacy of Trowulan*, Singapore: Natioanl Heritage Bound

Sakai, Takashi

2008, 'Preliminary Study of Vietnamese Decorated Tile Found In Java, Indonesia (1)',『美術史研究集刊』25, 国立台湾大学芸術史研究所

Fig-1 Hexagonal bricks

Fig-2 Wiringin Lawang

Fig-3 Bajang Raru

Fig-4 Troloyo

Fig-5 Trowulan Museum

Fig-49 Demak Mosque Mihrab

Fig-50 Kudus Minaret

Fig-51 Kudus S Gate

Fig-55 Kudus Minaret relief

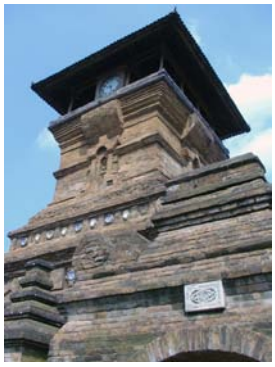


Fig-53 Kudus N Gate & Minaret

Fig-6 CT1

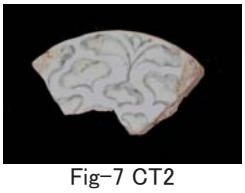


Fig-7 CT2

Fig-8 CT3

Fig-9 CT4

Fig-10 CT5

Fig-11 Q1

Fig-12 Q2

Fig-13 Q3

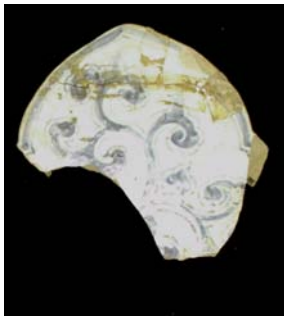


Fig-14 Q4

Fig-15 Q5

Fig-16 Q6

Fig-17 Q7

Fig-18 Q8

Fig-19 CI1

Fig-20 CI2

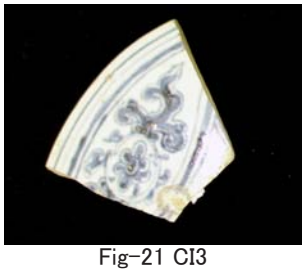


Fig-21 CI3

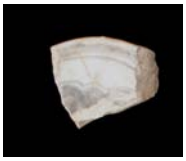


Fig-22 CI4

Fig-23 CI5

Fig-24 CI6

Fig-25 L1

Fig-26 CST1

Fig-27 CST2

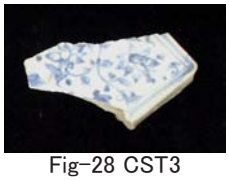


Fig-28 CST3

Fig-29 CST4

Fig-30 CST5

Fig-31 CSS1

Fig-32 CSS2

Fig-33 CSS3

Fig-35 SP1

Fig-36 SP2

Fig-37 SP3

Fig-34 CSS4

Fig-38 SQ1

Fig-39 SQ2

Fig-40 SQ3

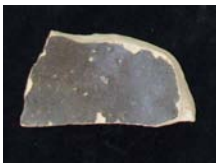


Fig-41 SQ4

Fig-42 SQ5

Fig-43 SQ6

Fig-44 T1

Fig-45 T2

Fig-46 T3

Fig-47 T4

Fig-48 M1

Fig-52 Kudus CST

Fig-54 Kudus SQ

Fig-56 Bonang CSS

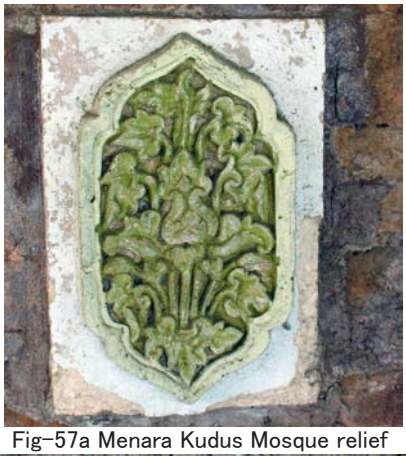


Fig-57a Menara Kudus Mosque relief

Fig-57b Menara Kudus Mosque relief

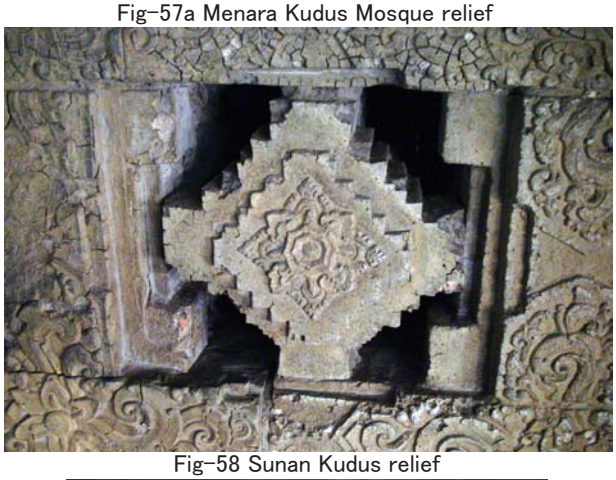


Fig-58 Sunan Kudus relief

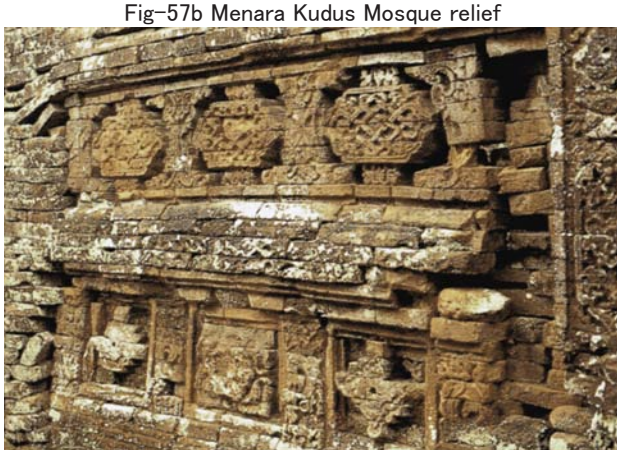


Fig-59 Langgar Bubrah Mosque relief

Fig-60 Mantingan Mosque relief

Fig-61 Mantingan Mosque relief

Fig-62 Sendang Duwur Mosque relief

Fig-63 Sunan Giri Mausoleum relief